

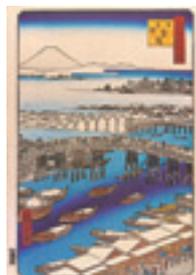
日本橋 — 近代商業の地を現代に再生する

リノベーション物語

歴史的資産と金融・商業ビジネスが融合し、独特の街区を形成してきた東京・日本橋。バブル崩壊後の低迷を乗り越え、いまリノベーション（再生）の動きが活発だ。街に買い物が戻り、丸の内、銀座、京橋を含むゆるやかな都市回遊性も生まれてきた。地域と企業が一体となって進める再開発プロジェクトをたどりながら、都市再生の意味を考える。

取材・文 広重隆樹 撮影 三浦健司

歌川広重（初代）「名所江戸百景・日本橋雪晴」安政三（一八五六）年



ライトアップされた日本銀行本館を背景に夕闇に出現した幽玄の世界。

現在の日本橋（明治四十四年開橋）。日本橋が初めて架けられたのは、慶長八（一六〇三）年。その後、火災などによって明治四十四（一九一）年に至るまで、一九回架け替えられた。日本橋の上に、首都高速道路が開通したのは、東京オリンピックの前身、昭和三十八（一九六三）年。



日銀本館が ライトアップされるとき

夕闇にネオバロック様式の石造りの建物が浮かび上がる。日本の明治建築を代表し、重要文化財に指定されている日本銀行本館。この日、二〇〇四年十月十日は、明治二十九年、日銀が創業の日本橋箱崎町から引越し、この建物で仕事を再開してから、ちょうど一〇八年目にあたる。

ライトアップを祝う式典が、夕刻から旧館の前庭で繰り広げられた。江戸消防記念会による木遣りのご祝儀の後、点灯式が催され、日銀・福井俊彦総裁は「日本橋の老舗の店や企業の皆さんたちとは、向こう三軒両隣という感覚でこれからも輪を広げたい」と、ライトアップへの思いを語った。とつぱり日の落ちたころ、前庭にしつらえられた舞台上で能「羽衣」が上演された。来場者は約一〇〇〇人。本館の石の肌合いは、能の舞台背景に意外とマッチする。現代の東京の街並みの一角に幽玄の世界が現出した瞬間、人々が思いを馳せたのは、この街の、江戸期より続く歴史と、その現代における役割ではなかつたらうか。

金融と商業の街

日本橋四〇〇年の盛衰

もともとは日比谷入江と隅田川の間で低湿地だった日本橋地区に町屋が建設されたのは、家康の入府以降のことである。文禄年間、現在の本石町辺りに金貨幣の鑄造所である金座ができた。その跡地に立つのが現在の日本銀行である。そうした縁もあって、日本橋は明治以降、日本の金融中心地として発達していく。

むろん日本橋には、江戸五街道の起点、そして近代商業発祥の地という顔もある。水路、陸路の交差する地の利は、全国から人と物資を集め、賑わいが絶えることはなかった。明治から昭和にかけて表通りでは大手百貨店と老舗名店による商業文化が栄え、そのかわら、一歩路地を入れば、そこは新橋、柳橋と並ぶ花柳界、街並みはしつとりとしたたずまいを醸し出していたという。

しかし、そうした賑わいや風情も、高度成長期の乱開発とバブル崩壊以降の景気低迷期を経て、しだいに失われていく。ちなみに日本橋エリアはビジネス街として東京でも有数の一等地



「日本橋が目指すのは「都市の回遊性」。新しいものと古いものが溶け合う街並みにさまざまな人々が行き交う。」

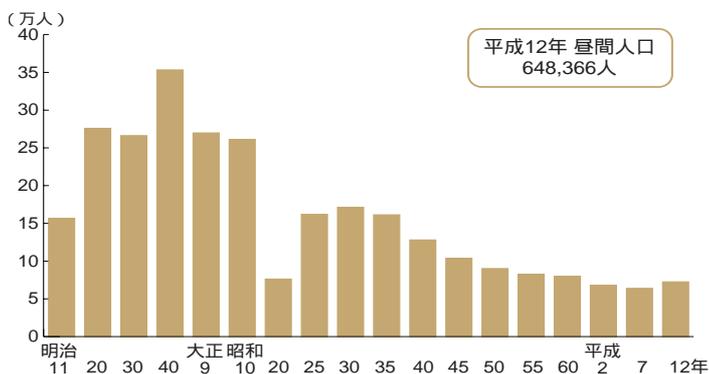


地域名を冠した事業部を発足させることになった。同社が手掛ける再生プロジェクトの第一弾が、東急グループとの共同事業である、百貨店跡に二〇〇四年一月に竣工した「日本橋二丁目ビルディング」とその一角を占める商業施設「COREDO日本橋」のオープン（三月）だ。船の帆をかたどった斬新なデザインは、日本橋活性化の文字通り「CORE（核）」になるものである。

なかでもCOREDOのテナント戦略

は興味深い。出店した三三店舗のうち、半数が東京初出店が新業態のテナント。地元のお舗と顧客を取り合うことなく、かつより若い世代を街に呼びこむ狙いが反映されている。実際、開業後半年時点でのCOREDOの来場者数は一日三万から三万五〇〇〇人と、百貨店時代の約二倍に達した。十月の三越日本橋本店新館オープンとの相乗効果もあり、地区のメインストリート・中央通りの人通りの様子からしても来街者は増え、かつ少し

日本橋界隈(中央区)の人口推移



(注) 中央区の人口推移を『中央区史』平成15年版 中央区政年鑑とともに中央区発行より作成。1947年(昭和22年)の中央区誕生以前の数値は旧日本橋区と旧京橋区の合算。

若返った感がある。今、この通りでは三井本館街区再開発計画が進められている。都の「重要文化財特別型特定街区制度」の初適用を受け、重要文化財「三井本館」を保存しながら、「日本橋三井タワー」の建設を行うというも。地上三九階という超高層ながら、景観との違和を生じないよう設計上の配慮が凝らされている。高層部には、世界的なラグジュアリーホテル「マンダリン オリエンタル東京」の入居が決定。海外のビジネスマンや観光客らが、この地で日本の近世、近代、現代の交錯を楽しむシーンが見られるのもまもなくだ。「東京駅を挟む日本橋と丸の内エリアが競合、対立的に取り上げ



歴史的資産と金融・商業ビジネスが融合し、いま新しい表情を見せ始めた日本橋



八重洲、京橋、日本橋地区を結ぶ無料巡回バス「メトロリンク日本橋」



中央通り「はな街道」。四季の花が咲きほこる花壇を、きれいに保っているのは地元の人々のボランティア活動。



「ストリートアートよみがえる大江戸パノラマ」。中央通りで開発中のビル工事の仮囲いを美しいアート空間として活用したもの。室町の日本橋三井タワー工事現場では、「江戸名所図屏風の世界」が展開され、街を歩く人の目を楽しませている。



られるケースもありますが、そういう狭い意識ではなく、東

京の都市再生の一環として捉えるべき。これからは、アジアのハブ都市として上海やシンガポールとの比較で、東京駅を中心とするこの地区がより活性化する方策は何かという、よりグローバルな視点が必要だと思えます」と、大江氏は語る。

温故知新の老舗力を活かす

こつした街並みの変化を、この街で商売を営む老舗の人たちはどう感じているのだろうか。

「界限には料亭が何十軒と軒を並べ、新内流しの三味線の音が絶

えなかつたと聞いています」

と戦前の日本橋料飲街の話をするのは、日本料理・日本橋ゆかりの当主、野永喜一郎さんだ。先代が昭和初期に創業し、二代目として七〇年代に代を継いだ。宮内庁出入りを許された伝統の味を守る一方で、調理人が客と相対して仕事をやるカウンター割烹という形式をいち早く導入するなど、革新も重ねてきた。

「新しい施設ができて人の流れが活発になった。インターネットで見たと違ってふらつと若い子がやってくる。昔の社用族は日本橋で夕飯を済ませ、銀座、六本木で飲んで、また日本橋に戻ってきたりしていた。そういう都市の回遊性が生まれるいいチャンスだね」と、喜一郎さんは最近の日本橋の変化を歓迎する。

変化を真正面から受け止めるの



日本橋ゆかりの野永喜一郎さん(右)と野永喜三夫さん親子



華やかに賑やかに……日本橋創業四百年を記念したイベント(平成15年3月)。数々の山車や神輿など約4000人の出場者がパレードした。

は三代目若旦那の喜三夫さんだ。テレビの料理対決番組にも出演、季節感と素材を活かしたモダンな日本料理は若い女性にも人気。

「時代は変われど、当主は包丁を離してはならないというのが我が家の家訓。今でいえばオーナーシェフですかね。京料理に雅を学び、江戸料理の粋と組み合わせる、陶芸やお茶を嗜んで調理人として

の素養を広げるといっても、オーナーシェフだからこそできること。この温故知新のオーナー感覚が日本橋の老舗力の根底にあると思います」

老舗はただ古びていくのではない。伝統を守りつつ、時代に合ったものを表現する。それは老舗の料理店だけでなく、日本橋の街全体の目指すべき方向のようにも思える。建築でいうリノベーションは、古いストックを活かしつつ、空間を再生するという意味合いがある。日本有数の都市観光資産街を愛する企業人、老舗の旦那衆こつしたストックに恵まれた日本橋は、これからの都市リノベーションの最先端モデルになり得るはずだ。

日本橋を変える学生たち

日本橋地域の再生には、企業、地域、行政だけでなく、学生たちも関心を寄せる。「日本橋学生工房」は東大、日大、芝浦工大、武蔵工大の建築・土木専攻の学生による組織。地域に入り込み、実地調査を通して、街づくりに関する提言を行っている。日銀本館のライトアップイベントなど地域行事にもボランティアとして積極的に参加。日本橋川沿いの地区にアーティストを住まわせ、地元との交流を図るなど、さまざまなアイデアを提案している。

アドバイザーの一人、森地茂・政策研究大学院大学教授は「これからの日本の街づくりにはもっと若い人の考えを取り入れるべき。地元のコンセンサスが取れないとき



も、ボランティア精神に溢れた学生の存在は合意形成の媒介役となる可能性もある」と、その活動を評価している。